

1. ノンネ・アペルト (Nonne-Apelt) 反応

試薬 硫酸アンモニウム約 85 g をフラスコにとり、精製水 100 mL を加え、あまり強くない火炎で熱しながら溶かし（煮沸するとアンモニアが逃げ、硫酸ができて酸性となるから不可）、数日間放置後ろ過使用する（もし酸性ならば、アンモニア水を加えて正しく中性とする）。

実施 小試験管に試薬 0.5 mL をとり、これに等量の髄液を重層して、3 分後に両液接触面に白輪を生じるか否かを観察する。そこで、試験管を振とうして両液を混合して混濁の状態を調べる。

評価基準 透明……（-） 痕跡白濁……（±） 軽度白濁……（+）
強度白濁……（2+） 乳様混濁……（3+）

注意 血液が混入した場合は、血液中の蛋白により陽性反応を呈する。ごく微量の血液ならば遠心して、上清を用いれば差し支えない。

2. パンディー (Pándy) 反応

試薬 フェノール 10 mL に精製水 100 mL を加え、強く振とうして数時間 37°C のインキュベータに入れ、さらに数日間室温に放置し、注意して下部の油状フェノール層から上清の飽和溶液を分離して用いる。

実施 清拭した時計皿に試薬 2~3 mL をとり、時計皿の辺縁から髄液 1~2 滴を静かに落とし、黒色のバックで 3 分後に両液の接触部に起こる変化を観察する。

評価基準 透明または淡い白濁……（-） 白濁……（+） 混濁……（2+）
強度の混濁……（3+） 乳状の混濁……（4+）

本反応は鋭敏であり、総蛋白量 25 mg/dL 以上のとき陽性となる。このため健常人でも白濁（+）程度になることが多いので判定上注意を要する。